

講座敦煌 6

敦煌胡語文



大東出版社

講座敦煌6 敦煌胡語文獻

昭和六〇年七月三十一日 初版印刷
昭和六〇年八月十五日 初版発行

定價七、八〇〇円

責任編輯者 山口瑞鳳
發行者 岩野文世
印刷所 熊谷印刷
製本所 関山製本

發行所 株式会社 大東出版社
東京都文京区白山一―三七一―〇
電話 (〇三) 八―六一七六〇七

ISBN4-500-00455-6 C1320 ¥7800E

W45/14

第六卷責任編集

山口瑞鳳

監修

塚本善隆

入矢義高

榎一雄

秋山光

和

編集委員

金岡照光

池田温

福井文雅

འདྲེན་པའི་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་

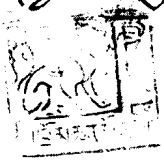
འདྲེན་པའི་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་

ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་

ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་

ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་
ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་ལྷ་སྐུ་འཕྲུལ་

༦། ལྷོ་ལོ་ལོ་ལོ། །འདུ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །
 ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ་ལོ། །



はしがき

『敦煌胡語文獻』と題する一冊の編集を依頼された時、初めから表題相応の内容は整わないものと思っていた。私の周囲にはチベット語文獻を扱う研究者は数も相当揃っていたものの、チベット語以外では森安孝夫氏にウィグル文獻を期待するだけであつて他の「胡語」の研究に携わる人を知らなかったからである。

それを承知で承服させられたのは、『講座敦煌』の体裁を整えねばならないという至上命令があつて、是が非でもし遂げねばならないものと思ひ込んでいたからに他ならない。そこで、体裁を整えるために、コータン語・ソグド語文獻の扱いを考えねばならなかつた。これらの言語はインド・イラン語の系譜にあるから、若い梵語学の研究者を急ごしらえの専門家として、督励を重ねて、せめてもこれらの關係文獻の輪郭だけでも報告して貰うしかないということになり、畏友原實氏に相談して、一応適当な人物に依頼することが出来た。

多数の研究者による合作というものが、すんなり一本になる場合は、編集者が特別に熱心で、しかも權威をもつて臨んでいるか、選ばれた人達が運よく皆揃つて熱心でなくては、出版社泣かせになるわけであるが、『敦煌胡語文獻』の場合はあいにく後者の好例になつてしまつた。

とくに快諾して貰へたと思つていたインド・イラン語系の報告が全くあてにならないことが入稿期限もおしつまつた時期にわかつたのには困惑した。止むなく、予定の時期には間に合わないことがはっきりしてしたが、この方面に岩松浅夫氏が興味をもっていると聞いて、無理やりコータン語文獻に関する報告の作成を依頼した。同氏の予定にない仕事を押しつけたので、望みのままの時節に原稿を手に入れることは出来なかつたもののⅡ―Ⅱに見るようなすぐれた報告が得られた。

これにやや先立って、いち早く原稿を提出していた森安孝夫氏から出版の余りの遅れに苦情が出され、その際、コーナー語とソグド語に関しては若い専門の研究者が海外の研究生活を終えて帰国しているから、予定にはないが、今から原稿を依頼してはどうかという申し入れがあった。即ち、熊本裕氏と吉田豊氏のことであった。私にはこれ以上出版を遅れさせてはとの懸念もあったが、最初から十全を期待出来ないと観念していた分野であったため、本格的に埋めることが出来るのならとの思いで、既に依頼してほぼ脱稿していた岩松浅夫氏との記述との間に、多少の重複が生じても夫々の論述の意義がすたれるわけではないとも考えて、森安氏を通じて両氏に参加して貰った。このようにしてⅡ―ⅠとⅢが加えられたのである。

チベット語仏教文献に関しては、敦煌出土の文献にどのようなものがあるかということを除いて一体他に何を論ずることが出来るのかという心配があった。どのような文献があるかという点はカタログによって知られることであり、梵語を主とする文献がチベット語に訳出されているだけであって、こと改めて別に論ずることが沢山あるとも思えなかったからである。

尤も、チベット人による仏教の論書があるものの、数は限られており、敦煌文献としての特殊性という要素はやはり期待できそうもなかったから、この方面の研究者に協力を求めながら何が出来るか不安に終始した。

編書という名にふさわしく、全体の見とおしに立って個々の分野で明らかにして欲しいことを、予め具体的に注文して報告を寄せて貰ったわけでは勿論ない。従って、部分的には論文集の趣きを感じさせるものもあるが、いずれも敦煌のチベット語仏教文献との関わりを保っているという点で読者の諒解が得られるものとして、そのままを見て貰うことにした。

従って、読者は本書によって、敦煌文献における胡語文献一般に対してわが国内外の諸学者がどのように取り組んでいるかという概略のみならず、部分的にはわが国の研究者による取り組み方そのものも観察できるであろう。

勿論、胡語文献を構成している個々の文献について、その内容を紹介した上で、どのような問題を持っていて、関係方面の研究の発展に将来どのように関与するかということまで大部分の報告が関説しているので、編者の不手際はさることながら、各論の質によってようやく實を果たし得たものと自らを納得させている。

本書の完成に当たって、大東出版社にかけた迷惑は夥しい。ひとえに、担当に当たった松浦可一氏の、忍耐づよい対応によってこの書は成ったということであろう。初期にその任にあつた進藤淑子氏の熱意と共に記して感謝したい。

昭和六十年七月

山口 瑞 鳳

第六卷

敦煌胡語文獻

責任編集

山口瑞鳳

凡 例

1 本文の表記は、当用漢字・現代かなづかいで統一した。但し、敦煌文献に類出する異体字や、固有名詞・引用文などの特殊な場合は、この限りではない。

2 チベット語・その他西域諸語・サンスクリット語等の非西欧語の場合は原則としてローマ字表記とした。

3 本文中の暦年は原則として西暦で表示し、必要に応じて中国・日本の年号等を()の中に記した。但し逆の場合もある。

例 一九〇三年(光緒二九年)

昭和五八年(一九八三)

4 外国語文献(漢文文献を含む)よりの引用文はできる限り邦訳したもの(現代語訳・訓読書き下し文)を掲げ、日本語による論文等の場合は、原則として原文通りとした。

5 書名・経典名・写本名等には「』」を付し、章篇名や学術雑誌所収論文名等は「|」を付した。

また、多出する文献名には、必要に応じて、略称・略号を用い、次のように記した。

例 『大正蔵』五三卷、二〇頁a (大正新脩大蔵経第五三卷、二〇頁、上段、を意味する)

6 スタイン本・ペリオ本・北京本等、敦煌の写本には略号を用いて、左記の如く表示した。

スタイン本 S二二三三二

ペリオ本 P五〇六二二

北京本 天五六

台湾中央図書館本 台湾一二七

レニングラード本 レニングラード且三三六四

目次

口 絵 (資料提供 東洋文庫)

はしがき (山口瑞鳳)

I	ウイグル語文献	森安孝夫	一
一	十一世紀後半以降の敦煌文書		三
二	敦煌藏経洞出土の古代トルコ語(ウイグル語)文書		一五
三	敦煌出土モンゴル期(元代ウイグル文書)		三七
II	コータン語文献		九
一	コータン語文献概説	熊本裕	一〇
(一)	はじめに		一〇
(二)	仏教文献		一〇
1	経典の翻訳		一〇
2	その他の仏教文献		一四
(三)	医学文献		一四

	(四)	文学的テキスト	……………	二七
	(五)	世俗文書、その他	……………	三〇
	二	敦煌のコータン語仏教文献	……………	四一
	(一)	敦煌出土のコータン語文献	……………	四一
	(二)	敦煌出土のコータン語仏教文献	……………	四一
	1	翻訳文献	……………	四一
	2	撰述文献	……………	七〇
	III	ソグド語文献	……………	八五
	一	はじめに	……………	八七
	二	ペリオのコレクション	……………	八九
	三	スタインのコレクション	……………	九六
	四	Ancient Letters	……………	一〇一
	五	オルデンブルクのコレクション	……………	一〇四
	IV	チベット語文献——仏教文献	……………	一〇五
	一	敦煌出土チベット語唯識文献	……………	一〇七
		袴谷憲昭	……………	一〇七

(一)	はじめに	二〇
(二)	經典に関する文献	二〇
1	『解深密經』及びその関連文献	二〇
2	『楞伽經』及びその関連文献	二二
3	『仏地經』及びその関連文献	二五
(三)	論典に関する文献	二八
1	『中辺分別論頌』と「マイトレヤの五法」	二八
2	『瑜伽師地論』及びその関連文献	三〇
3	『阿毘達磨集論』及びその関連文献	三四
4	ヴァスバンドゥの「八部の論書」と『デンカルマ目録』の論典列挙順	三七
(四)	その他の文献	三三
1	『成唯識論』及び漢訳仏典に関する文献	三三
2	未確認の唯識文献について	三五
3	著作文献としての宗義書における唯識の位置	四〇
(五)	おわりに	四五
二	二 仏教綱要書	二五
	松本史朗	二五
(一)	和訳	二七

1	文献 a〔全訳〕	二六七
2	文献 b〔ST. No. 693 の全訳〕	二七〇
3	文献 c〔部分訳〕	二七二
4	文献 d〔部分訳〕	二七五
5	文献 e『見解の区別』〔部分訳〕	二八四
(一)	解説・問題点の指摘	二九二
三 中観系資料		
	斎藤 明	三一
(一)	はじめに	三一
(二)	『根本中論註無畏論』	三七
(三)	『縁起心論積備忘録』	三三
(四)	『修習次第・初篇』	三五
(五)	むすび	三二
四 タントラ経典		
	平松 敏雄	三九
(一)	チベットの仏教導入	三九
(二)	前期弘通期におけるタントラの種類	三三
1	タントラ分類	三三
2	内タントラ乗の所依タントラ	三四

目次		
七	吐蕃訳経史	原田 覺……………四九
	吐蕃仏教と敦煌	……………四九
	仏典翻訳の諸伝承	……………四〇
六	律文献	沖本克己……………三五
	(一) はじめに	……………三五
	(二) 外況としての漢文律典	……………三七
	(三) 吐蕃仏教における戒律	……………四一
	(四) 敦煌の蔵文戒律典籍	……………四八
	(五) おわりに	……………四四
五	沙州における写経事業	西岡祖秀……………三九
	——チベット文『無量寿宗要経』の写経を中心として——	
	2 敦煌のタントラ論書	……………三〇
	1 敦煌のタントラ經典	……………三九
	3 密教マハーヨーガ乘に属するもの	……………三一
	2 中国禅に属するもの	……………三三
	1 密教マハーヨーガ乘に属するもの	……………三一
	c 結び	……………三〇
	(三) 敦煌のタントラ文献	……………三九